

スポーツにより生じた大転子骨端線離開の4例

○木村 由佳 (きむら ゆか)(MD), 津田 英一 (MD), 山本 祐司 (MD),
奈良岡 琢哉 (MD), 石橋 恭之 (MD)

弘前大学大学院医学研究科 整形外科学講座

【目的】

大腿骨大転子骨端線離開は比較的稀であり、多くは高エネルギー外傷により生じる。今回、外傷歴がなくスポーツによる繰り返すストレスにより発症したと考えられる大転子骨端線離開の4例を治療する機会を得たので報告する。

【症例】

症例は陸上短距離選手 (13歳, 男子), 空手選手 (12歳, 男子) とサッカー選手 (12歳, 女子), バスケットボール選手 (8歳, 女子) の4例であった。いずれの症例も外傷歴はなく、スポーツ活動中に徐々に股関節痛を自覚して当科受診となった。全例独歩可能であったが、軽度の疼痛回避歩行を認めるものが2例あった。股関節の可動域制限はなく、大転子に圧痛を認めた。X線検査にて大転子骨端線に左右差を認め、大転子骨端線離開と診断した。約1ヶ月間スポーツ活動の休止を指示し、リハビリテーションによりストレッチ指導と筋力訓練を行い、疼痛は軽減し2~4ヵ月後には競技復帰可能であった。

【考察】

大腿骨大転子は股関節外転作用をもつ中殿筋、小殿筋と、膝関節伸展作用をもつ外側広筋の付着部であり、これらの筋が同時に働くことにより、大転子骨端線を安定化しているとされている。本症例ではこれらの筋の不均衡の状態が繰り返すストレスが加わり、大転子骨端線離開が生じたと考えられる。手術治療を要した報告例もあるが、保存療法により疼痛は軽快し競技に復帰可能であった。